



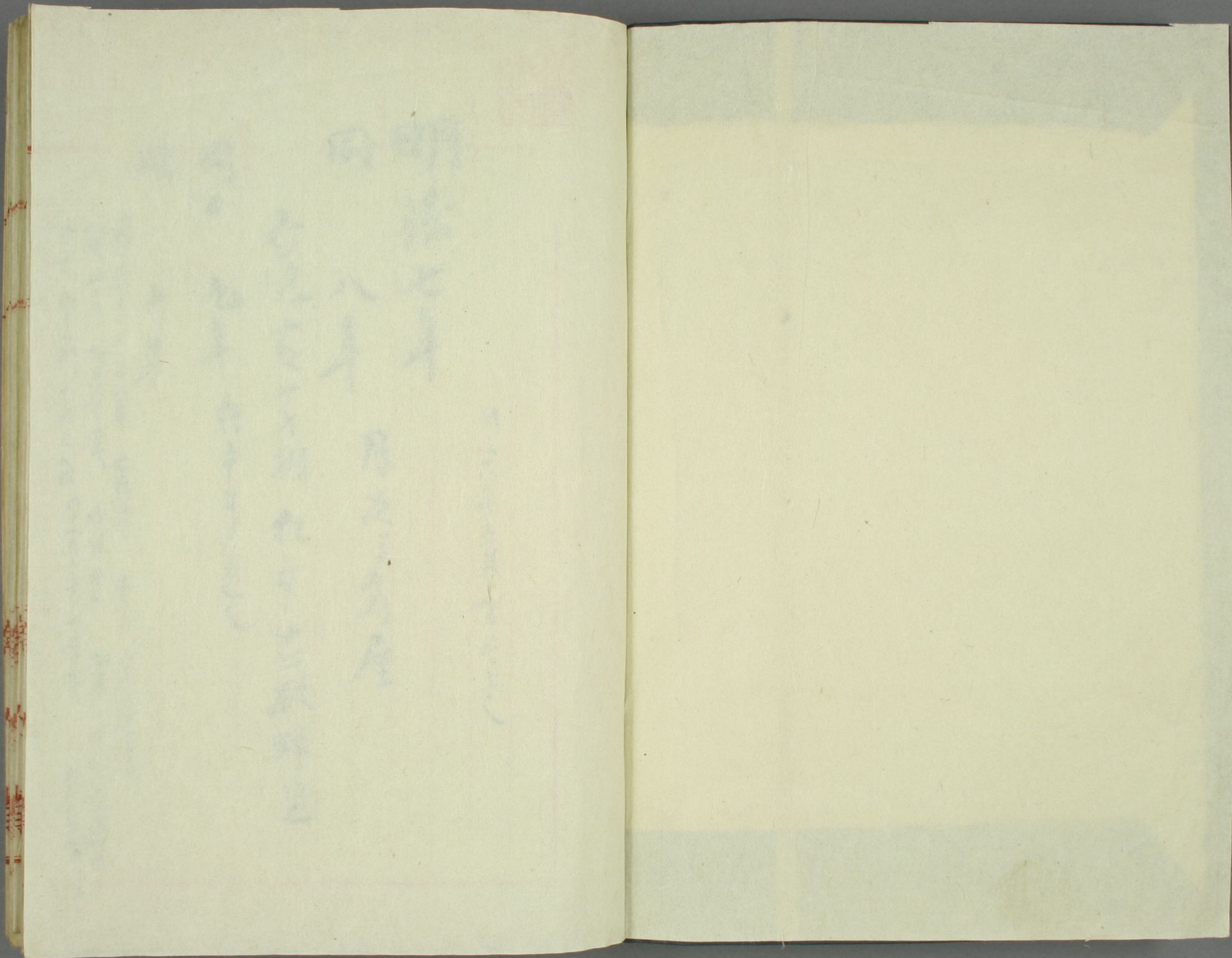
明治天皇御製衣

近藤芳樹
松平忠敏 拜見

明治七年 至十二年 月次 并 常在 取 籍

特別
~ 2
4867
29







清
七
年

明治七年

清
七
年

同八年

月次
五月
上

右近友女御
打平
忠敬拜見

清
七
年

同日九年
打平
忠敬

同十年

一月
二月
三月
四月
五月
六月
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月

續
納
録

明治七年二月三日十三日廿二日

霞姑様

今般より其の衣もろく麗きてはまけのころこそはま

四句
定むまめ

梅姑同

今般より其の梅も麗きてまきの白く人よきはま

梅句人よきはま
まに人よきはま

雪出谷

今般より其の日記をよみてはまけのころこそはま

まにまに日記の

まにまに日記の

梅姑同

枝書逢昔

文抄むりの書をとてさそむに成に直にふか

四司引人

山霞

朝分く、雲のいぬたを引て心もあらずにみゆる

れり
こえりうり

三月二十三日

枝遠世書

春の枝の甘もるは花咲きてかきまたり

可十たのり

春日

留まの根乃けり、春の朝見けさる枝はさまの、えり

いさか

藤原鎌足

はやくせむいさかして其心のいりさむくさる枝のむ

枝花初開

枝花初開の枝乃初花をみるたの、まきけしき

このむけい

雲柙流水

續竹書

あまのつゆに水にうらむる若木のいづれをばはまの比に

海上霞

和国の原をうらにあまをまき原にみよもいともまはる

とて

よふまは

四月三日十三日

帰存連雲

白むく雲を細月がきてり存の初も河のうらあまをま

いづれ

朝見花

みづをけしむる核はまて朝日あまのまのあ

いづれ

核

あまのつゆに水にうらむる若木のいづれをばはまの比に

いづれ

岡龍

法原の原をうらにあまをまき原にみよもいともまはる

とて

よふまは

朝落花

あまのつゆに水にうらむる若木のいづれをばはまの比に

いづれ

五月三日十三日廿二日

新樹露

若緑志者梢に冷夏にあく白あもきをみせり

とさうま

七十一

たのしみ

池邊柳

えつをい比の何々の喜振の深けをみはにまは

たのしみ

竹為原

吳竹のびくまゆを皮うてかりぬをニ我もねり心

竹の
たのしみ

たのしみ

たのしみ

新樹好月

見つはは志々梢の又さ葉のあつらひのさ 膝

知花

庭の面のおをををみつを枝向々にほこるにさ

たのしみ

山新樹

みつをいささ乃心奪い此は露のつらさあつらさ

たのしみ

たのしみ

山新樹
たのしみ

六月三日^{十一日}廿二

庭夏草

心
心
心

軒
軒
軒

数
数
数

夏風

志
志
志

七月三日十三日廿二日

郭
郭
郭

志
志
志

友
友
友

志
志
志

心

心

心

常門書

六月三日十一日廿二

庭夏草

庭夏草の庭にあひまゝの草の跡も消くしけにか
いづれ

朝軒

朝軒の柱に影をうつすつづやまの心
いづれ

採早苗

みづの田のまゝさかすの女はあつたか
いづれ

夏心

心も夏の衣を脱いで忘れぬ末の
いづれ

夏風

志多葉の枝の本端にまどれ枝の風を
いづれ

七月二日十三日廿二日

郭七敷布

をらうう鳴きまはるうたも心も
いづれ

友叔待月

友の心もまはるうたも心も
いづれ

晴天鶴

錦書の晴方、夏もあつたの、白代よりあつたの、あつた

あつた

瞿麦花露

秋もあつた、夏もあつたの、あつた、あつた、あつた、あつた

あつた

瞿麦花露

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

あつた

納涼風

夕々帯て松の本陰に立つる枝、秋風を吹く

八月二十一日

松下泉

松陰の岩沼の法衣とあつた、あつた、あつた、あつた

あつた

園

くも、秋も道をもあつた、あつた、あつた、あつた、あつた

あつた

西風飄一葉

あつた

吹風の多きにつれて木の葉の落ちる秋の意を感ずる

山夕之

夕暮のあけぬるに山を望む所のあはれなる秋の意を感ずる

蒸気船

うち出で海路をゆく船のゆくは速なり秋の意を感ずる

扇

扇のふたは秋の意を感ずる

1607

九月二十三日オキ

草花を

見たりは秋の意を感ずる

秋朝雪

朝雪のふりし秋の意を感ずる

1607

名不

聞かぬは秋の意を感ずる

續的書

秋心

秋心あきこころはちいしや候きむら秋の花を

海上月

海上の浪やちかぬ秋の光る海を秋の月を

秋生をみ

秋のに錦いろをむら秋の花乃出をみる葉を

十月二十一日

了哉

秋の海はあきうみ深き中あふみにちかぬ光をたて候る海を

朝麻

朝麻のなきふあさあしのちかぬ光をたて候る海を

秋菊綴人

秋菊あききく綴つむりて候る海を

同接云

よもひくらふ々々里に、おれきよいかいふたけえさるかた

高山ふん

國のあしはしく、Cambridge の University に

て

21

菊花

らむはくまをばりて、林きの白く華をみまひの

十月

十一月三十日

紅葉浅深

村のあしはしく、Cambridge の University に

電信機

百のあしはしく、Cambridge の University に

十月

21

山紅葉

むし雲のあしはしく、Cambridge の University に

新法時句

おかしらふりての路をたづねていそぎてふゆの
しんせいのり 2

十二月二十一日

池田似續

うきかたのくまはなは水のうきかたのくまはな
て たらち

落葉浮水

ゆきちりのけいせいみし 吹風のきくくふなるはち

源夜露

長秋のふりまはにけいせいのきくくふなるはち
おかしらふりての路をたづねていそぎてふゆの
しんせいのり 2

おかしらふりての路をたづねていそぎてふゆの

川中

氷のじきん初

吹風のきくくふなるはち けいせいのきくくふなるはち

家林似續

いそぎてふゆのしんせいのり 2

冬

おかしらふりての路をたづねていそぎてふゆの
しんせいのり 2

おかしらふりての路をたづねていそぎてふゆの

ついで

ついで

宮内省

明治七年二月十一日 紀元節

梅有喜色

幸ふく日を二三日 梅の香いそぐもあまけり

明治七年二月三日

霞始降

今朝よるハ霧乃衣多ら 空もまじの

二階台前の衣用なく 風雨可まじのころとけい

梅始開

いそよるハ梅は梅も花咲て 春はまを人小きる

梅上り此道今が

十三日

鴨出谷

谷

鴨

明治七年二月三日

霞始降

今朝よりハ霧乃衣多ク
本朝の霧の降りしと昔の如く
二階台前の衣用を 空も曇り
霧の袖に妻鳥を

梅始開

今よりハ梅は梅も花咲て
霧の袖に妻鳥を 春はまを人小き
梅上り此道今や

十三日

鷺出谷

谷
鷺の羽は白く
谷の底に

廿三日

披書逢昔

文机の書 日暮の光 花の影 月夜の心 空の雲 水の波

申上 作者はくす

山霞

朝霧の衣 朝の衣 朝の衣 朝の衣 朝の衣 朝の衣

霞の衣 朝の衣 朝の衣 朝の衣 朝の衣 朝の衣

三月三日

梅遠薫

春の梅の林も 春の梅の林も 春の梅の林も 春の梅の林も

下 梅の林も 春の梅の林も

春日

春の日の光 春の日の光 春の日の光 春の日の光

甲上 作者はくす

十三日

明治七年 二月十三日

春風あや

春風の吹よつて 春風の吹よつて 春風の吹よつて 春風の吹よつて

廿三日

披書逢昔

文机の書 日暮を感て心ゆく 衣の袖に

申上作書はくす

山霞

朝衣の衣袖に 山霞の衣袖に 衣の袖に

衣の衣用なく 赤柿白なる 衣の袖に 語勢よく 衣の袖に

三月三日

梅遠薫

春方此梅の林も 衣の袖に 衣の袖に

下梅白梅なる 衣の袖に

春日

衣の袖に 衣の袖に 衣の袖に

申上作書はくす

十三日

藤花初開

衣の袖に 衣の袖に 衣の袖に

梅花初開

梅の花

待^待春^春花^花の^の枝^枝の^の影^影を^を照^照らす^{らす}花^花の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

朱^朱の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

十三日

垂^垂柳^柳臨^臨水^水

垂^垂柳^柳臨^臨水^水の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

海^海上^上の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

海^海上^上の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

白^白月^月三^三日

歸^歸雁^雁陣^陣中^中

歸^歸雁^雁陣^陣中^中の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

名^名の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

十三日

朝^朝見^見花^花

朝^朝見^見花^花の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

名^名の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

櫻^櫻

櫻^櫻の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

名^名の^の影^影を^を照^照らす^{らす}

白^白月^月三^三日

廿三日

閣籠

大徳寺

体宗の御書寫の年をくし圖の間にいへり

めはし

朝露花

此朝露花の標の障面ははきまのしん

いふ

五月三日

新樹露

若録志を梢に合し

池邊柳

見り

十三日

竹為師

若竹の

いふ

新樹坊月

若竹の

三浦尚程傳の巻々

宮内省

廿三日

甲花

庭の西に甲花垣を築き、其の枝白く、葉は青く、

山新花

庭の東に山新花を植へ、其の葉は緑く、花は白く、

六月三日

庭夏草

本朝の世に、八代将軍徳川家康公の御代に、

朝花

朝花の種を、徳川家康公の御代に、

十三日

採甲苗

見付の甲苗の種を、徳川家康公の御代に、

夏草

宮内省

山々も緑のやあふふり志る指の交はるる一色

廿三日

津嵐聚舞

おのづかの火をいぢめし草の心は人の心

夏風

志るの草の社の木陰をよもぎも枝を風もきく

七月三日

郭公教聲

ささるるの草の葉のまのまの郭公の山林を歩けり

夏夜待月

おのづかの草の土をよもぎも葉のまのまの月の心は

十三日

晴天鶴

朝空の鶴の羽をよもぎも心のまのまの心のまのま

國産草木之類

植おき 花のたのむる花をくさし玉をのち花のたのむる

廿三日

聖者勝衆花

花のたのむる花の中にも花のたのむる花のたのむる花

納涼風

夕の涼し松の木陰のまじりて松のたのむる花のたのむる

八月三日

松ノ泉

松陰のまじりて花のたのむる花のたのむる花のたのむる

花のたのむる

雨

花のたのむる花のたのむる花のたのむる花のたのむる

花のたのむる

十三日

西風飄一葉

花のたのむる花のたのむる花のたのむる花のたのむる

山谷玄

わかにあふくはちりやうのふたつとすべし
よのすがたはあはれなるに
ふたつとすべし

廿三日

標記

うらさくら花のうらさくら花のうらさくら
うらさくら花のうらさくら花のうらさくら

扇

あはれなるにふたつとすべし
よのすがたはあはれなるに
ふたつとすべし

九月三日

草花集

あはれなるにふたつとすべし
よのすがたはあはれなるに
ふたつとすべし

秋朝雲

あはれなるにふたつとすべし
よのすがたはあはれなるに
ふたつとすべし

十三日

名所山

あはれなるにふたつとすべし
よのすがたはあはれなるに
ふたつとすべし

秋山

秋の山は色づきて
秋の山は色づきて
秋の山は色づきて
秋の山は色づきて

廿八日

海上月

秋の海上は月明かり
秋の海上は月明かり
秋の海上は月明かり
秋の海上は月明かり

秋盛園

秋の園は盛りに
秋の園は盛りに
秋の園は盛りに
秋の園は盛りに

十月三日

朝鹿

朝の鹿は静かに
朝の鹿は静かに
朝の鹿は静かに
朝の鹿は静かに

朝鹿

朝の鹿は静かに
朝の鹿は静かに
朝の鹿は静かに
朝の鹿は静かに

十三日

秋の園

袖 衣の 袖の白き衣を着て白菊の花を手にして

紫袴衣

東 の 東の山を越えて西の山を越えて

廿三日

高千穂

園 の 園の松の影に花を散らす

七の節

菊花園

林 の 林の松の影に花を散らす

東 の 東の山を越えて西の山を越えて

十三日

電信機

百 の 百の松の影に花を散らす

百の松

山行記

此の二冊は時を⁹経る⁹に⁹伴⁹て⁹作⁹ら⁹る⁹の⁹書⁹也

廿三日

行路時

此の二冊は時を⁹経る⁹に⁹伴⁹て⁹作⁹ら⁹る⁹の⁹書⁹也

十二月三日

池木似鏡

此の二冊は時を⁹経る⁹に⁹伴⁹て⁹作⁹ら⁹る⁹の⁹書⁹也

池田書房本

此の二冊は時を⁹経る⁹に⁹伴⁹て⁹作⁹ら⁹る⁹の⁹書⁹也

十三日

池田書房本

此の二冊は時を⁹経る⁹に⁹伴⁹て⁹作⁹ら⁹る⁹の⁹書⁹也

三冊

此の二冊は時を⁹経る⁹に⁹伴⁹て⁹作⁹ら⁹る⁹の⁹書⁹也

宮内省

廿三日

寄神祇祝

以々千々世國々寄々天地の神のちるは末々々々

冬日

朝臣出て見り子々庭の白おあの也は日は新は也は

明治八年一月廿三日

水邊若菜

新らは三年にはつ連つ川の梅乃はちをはつきては若菜は也

と

と

二月二十日二十日廿二日

雪中梅

ありつち梅は花には似ては咲梅はその花乃は香をはい

胡心は庭

朝はあきて見つて心はのは心はをはまはり先はには心はをはり

草寫人心

かゝる心は筆のまゝにあらざるものなり

海上霞

はろくとみづのまはりのあまやかあはれつらき雲

明治八年二月廿二日

後原百川

そのるつらき雲のまはりのあまやかあはれつらき雲

梅花盛

はろつらき雲のまはりのあまやかあはれつらき雲

梅花盛

宮内省

花盛

はろつらき雲のまはりのあまやかあはれつらき雲

〇〇〇〇

其年寫人心

かゝるいふ筆のまゝにたゞしきまうんあつちのいふまゝにいつて

〇〇〇

海上霞

はやくとみれば ~~あ~~のあまふかきあつちのまゝ乃 〇〇〇

〇

三月十四日

〇〇

ふまをたけのこをまじひにふのあまのあつちのまゝにいつて

〇

〇〇

梅花盛

はやくもまゝのつててはのあまの梅の梢にいつて

〇〇

山岸春草

あまのいふまゝのまゝにいつて

四月十三日

〇〇

松石

みづをたけまゝのまゝにいつて

五月二十一日

練兵

并けゆ國のちうとつしむれんをれらふ習志野の原

まゝ

山田苗代

みりてま^あい田ゆさ^あ年^あの^あ男^あ苗代^あを^あ任^あせ^あつ^あら^あれ

まゝ

新巻

れ^あま^あゆ^あ水^あも^あは^あら^あは^あ葉^あの^あま^あを^あま^あつ^あき^ある^あ後^あ波^あの^あ花^あ

開城

く^あま^あは^ある^あの^あ田^あ乃^あ城^あ之^あか^あの^あ晴^あか^あは^あを^あに^あけ^あけ^あり

ま

あ

ま

庭新樹

み^あま^ある^あ庭^あの^あ梢^あの^あか^あは^あに^あお^あも^あ涼^あさ^あな^あ乃^あ新^あ樹^あ

あ

毎夜待郭

こ^あか^あな^あと^あお^あも^あく^あに^あ晴^あを^あ待^あま^あら^あに^あな^ある^あ郭^あの^あか

六月二十三日

雨中静

あけの山月をよみし一息も寂志つらきまきれのま

あけの山月

里早苗

あけの山月をよみし一息も寂志つらきまきれのま

あけの山月

経夜月

あけの山月をよみし一息も寂志つらきまきれのま

上庭、魚橋

風をよみし一息も寂志つらきまきれのま

遠村煙

あけの山月をよみし一息も寂志つらきまきれのま

夜朝

あけの山月をよみし一息も寂志つらきまきれのま

七月二十

夕之三雲

○ 遠里とみえつゝ雲のなをくくりに随ふ夕三の雲

草堂似露

○ 志多あふまは葉にほのくは雲火をちのぬくもみも

七月廿九日

遊

八月廿九日

早涼知秋

○ 秋の涼しきもと涼しき胡風も秋を知らぬまのぬく

月下交遊

○ 日下七月十日

池邊

○ 秋の涼しきもと涼しき胡風も秋を知らぬまのぬく

草堂似露

夕之三雲

遠里をみえつる雲のなほやうくに晴る夕三の決雨

遠里をみえつる雲のなほやうくに晴る夕三の決

雲川

九月三日十二日廿二日

秋寂言夢

秋をさす秋の葉風はみる姿をせらうくぬふ秋の自枕

早涼知秋

あさ出づとも涼は朝風は秋をおかゆさきのぬる

月下交遊

とされくも晴るさうなるさきの月を友とらみさる

月茶秋

としいは月のさき夕の庭のありの秋の花さうらう帰る

草花のあはれ

○ 嘆ききく習書のゆかりのそよ子たるかおの教も

明治八年十一月二日 天長寺

天晴有秋也

けり日のこを舟ゆらぐはつてありの教もくはがり後

十月二十日 十一日

十月十一日 十一日

時雨晴

ふのりからむとみよふとていふの招きは時雨あつち

林の女うぶまらあつちのききありぬをささく林のむら

つひ

きき

林子卒

活きつた女の中をよみ流るるの如く林のむら

こ

きき

十月

Atsuko's diary

Atsuko's diary

京内書

京内書

美さく雪舟のゆかしの雪乃とよ結つるおの敷もひら

月茶法

光月乃光とまたかんの世の晴事も澄つるう

十月三日十二日

十月十三日

時雨吟

ふみのかりかるとみまのうらやまの栞をに時雨うらや

林の女うらやまらわつちの雪もあつたおの雪もあつた

つら

ま

林子平

活まらぬおの雪もあつたおの雪もあつた

こ

ま

心月

心乃とのねの雪もあつたおの雪もあつた

十一月十三日

日

雪

みづの雪もあつたおの雪もあつた

暎とく習書のゆふとのそ乃とよはるるおの敷もひら

月茶法

ては 沈黙の心は 静かに ありて 静かに ありて

静かに ありて

秋風に 吹くも 静かに ありて 静かに ありて

同掛云

林の女に 衣手ちぬらつちの 暮も ありぬるも 林の 静かに

林子平

活きつる 女に 衣手ちぬらつちの 暮も ありぬるも 林の 静かに

心月

心乃との 木の 静かに ありて 静かに ありて

十一月十三日 木曜日

日 十一月十三日 木曜日

静かに ありて

みづの 静かに ありて 静かに ありて

此ろの庭に白ひを惹うて候むく菊の花のうら

110651

尾徳

わさあかりあけの多うに
たてし あひこ あき
いさよのさねは
あはれ

十二月三日十三日廿二

浦千鳥

風をうたふつふ候も
あはれ あはれ あはれ
あきよのさね

110652

孫菊

秋の色を冬にのうて
あき あき あき
あきよのさね

屋上敷

風のさびたつて
あき あき あき
あきよのさね

冬朝

胡戸のてみるそら
あき あき あき
あきよのさね

110653

家國祝

ふせよりのけりぬる
あき あき あき
あきよのさね

常竹雀

池水鳥

比水にむきふあをいふふむれつあふふ
七
七
七

七
七
七

明治八年月次御會

一月廿三日

水邊若菜

新ら 去年に於て川の水邊に若菜を生きたる
二兩句は昔の傳言若菜はあつたか

二月三日

雪中梅

降はゆる梅は雪に埋まて咲梅は雪の香をす

朝山霞

羽戸あきし見りし山あやしくの千あやしくきく春あやしくあらしあやしくまあやしくまあやしく

日 十三日

筆一寫入

かたむくしあやしくのあやしくはあやしく今あやしく世あやしくのあやしくまあやしくまあやしく

上現在下未来傳述在り付る

日 廿三日

海上

かたむくしあやしくのあやしくはあやしく今あやしく世あやしくのあやしくまあやしくまあやしく

よく聞之付る

三月三日

鷺

哀ちのまのあやしくのあやしくはあやしく今あやしく世あやしくのあやしくまあやしくまあやしく

四時あやしくのあやしくああやしくはあやしく今あやしく世あやしくのあやしくまあやしくまあやしく

梅花盛

ふくあやしくのあやしくああやしくはあやしく今あやしく世あやしくのあやしくまあやしくまあやしく

市上あやしくのあやしくああやしくはあやしく今あやしく世あやしくのあやしくまあやしくまあやしく

日 十三日

岸一書

若あやしくみあやしくのあやしくああやしくはあやしく今あやしく世あやしくのあやしくまあやしくまあやしく

紫の首

四月十三日

花盛

此頃ハ赤々^ハ木^ノ花^ノ志^ノ乃^ハ人^ノ世^ノの^ハ成^ルの^ハ時^ニ也^{ナリ}

五月三日

續作

今^ハ十^ノ月^ノ國^ノの^ハ成^ルの^ハ時^ニ也^{ナリ}

子回書

今^ハ十^ノ月^ノ國^ノの^ハ成^ルの^ハ時^ニ也^{ナリ}

同 十三日

水盛

今^ハ十^ノ月^ノ國^ノの^ハ成^ルの^ハ時^ニ也^{ナリ}

蘭蛙

今^ハ十^ノ月^ノ國^ノの^ハ成^ルの^ハ時^ニ也^{ナリ}

同 廿三日

書

庭新樹

緑きや庭の栞せかき葉はかくも疎き木の朝露
三律句なまゆばあつて

毎夜待郭と

たのこやい夜ごとくゆるうと待たせり
かへたむらたつた

六月三日

雨申郭と

何とて雨申郭とあつて程きなるたつた

里早苗

あつた苗は早苗とあつて程きなるたつた

日 十三日

短夜月

出る月三葉の雲井のまのちかき
あつた

庭盧橋

風をまき花橋をまき
あつた

同廿三日

遠村煙

月夜の影の遠山里の夕暮の民のかすかなささるる
少く聞かすささるる

夏朝

朝のささるる出はまゝの朝の風吹く袂はささるる

七月三日

夕立雲

遠^里里の夕立雲の影の民のかすかなささるる

草堂似露

志るの草堂の影の民のかすかなささるる

九月三日

萩散馬夢

萩の影の萩の影の民のかすかなささるる

早涼知秋

おき出の袂はささるる朝の影の民のかすかなささるる

常内省

かろる

同十三日

月下交遊

久まきゆぐつてりてりる^た大空の月を友とみる

月前萩

市出る月の光は庭の萩の花のまもりや

同廿三日

草花露送

笑はけ望遠の子粒の花のうら結の夜の露を

よくゆえは

月若貴

十月月の光は庭の萩の花のまもりや

十月三日

園鹿

秋風はまじりてりる^た大空の月を友とみる

かろる

園鹿

常内省

津の女の衣うちぬるはらのきかあまきしきりし林のよき

谷田 十三日

林子平

津の女の衣うちぬるはらのきかあまきしきりし林のよき

山月

山の傍の松の木の下には十月の夕陽の光をみれば

十二月十三日

菊花

此頃八尾の白ひをききしとて笑むし菊の花のよき

日 廿三日

尾徳

此頃八尾の白ひをききしとて笑むし菊の花のよき

同日 十二月三日

浦千鳥

同じく浦の千鳥の音はききしとて笑むし浦のよき

浦の千鳥

残菊

秋のやも暮るるこゝろに
あはれみおぼゆる
あはれみおぼゆる

同十三日

屋上殿

愛河のまはるる
あはれみおぼゆる
あはれみおぼゆる

あはれみおぼゆる

冬朝

朝はあまのついでに
あはれみおぼゆる
あはれみおぼゆる

よく聞え侍る

同廿三日

寄園祝

千世のあはれみおぼゆる
あはれみおぼゆる
あはれみおぼゆる

也火

あはれみおぼゆる
あはれみおぼゆる
あはれみおぼゆる

常の書

明治九年一月次御會

一月廿三日

待早鳥

考此の書はなまのいそひし今年に當のうちは

佛上りお照應今が

二月三日

柗録録新

かゝるすもいともいりしすも柗のみるるはたうく

深雪

宮内省

宮内省

雪のふりかへては春の気配も感じられぬ

三月十三日

氷解

お春の気配も感じられぬ

早春の天

様々春の気配も感じられぬ

よく聞かせる

三月廿三日

雪のふりかへては春の気配も感じられぬ

雪のふりかへては春の気配も感じられぬ

雪のふりかへては春の気配も感じられぬ

白梅の枝は春の気配も感じられぬ

よく聞かせる

三月三日

梅紅白

白梅の枝は春の気配も感じられぬ

雪のふりかへては春の気配も感じられぬ

三月十三日

源光圀

國乃為侍奉まこと有まこと其まこと世まこと人まこと之まこと書まこと江まこと傳まこと入まこと下まこと也まこと

日廿三日

園中藏

此乃為侍奉有其世人之書江傳入下也

四月三日

每朝見花

此乃為侍奉有其世人之書江傳入下也

四月十三日

春曙

此乃為侍奉有其世人之書江傳入下也

對花

此乃為侍奉有其世人之書江傳入下也

五月廿三日

雲雀清霞

春宵の静けさ空に夕暮を合点するの静けさ

五月三日

雨後苗代

降るのいるを待ちし御の男は田圃を出て種をふる

庭藁

葉の如きも右足に庭のおもて藁を藁の帯をふる

五月十三日

望遠鏡

久遠の如くも右足に望遠鏡の帯をふる

新樹風

あやころりきつる新樹風をふる

同廿三日

新竹

緑の竹の若葉の色は出て降りる比古の竹

言上ノ事

雲雀清霞

春の空をゆく雲雀の空を渡る鳥の姿を
見ると清霞の如く
空を渡る鳥の姿を
見ると清霞の如く

五月三日

雨後苗代

降るの雨をよみては
田の男は田面を出て種を
おろす

庭藁

葉の如くもみぢの庭の
おもひは
笑の藁の如く

五月十三日

望遠鏡

久遠の如くもみぢの庭の
おもひは
笑の藁の如く

新樹風

あけの空をゆく新樹の
風をよみては
新樹の如く

同 廿三日

新竹

緑の竹の若葉の色は
出ては
竹の如く

夏朝

稍なしく快晴なり。今年も秋はと云ふらん。

九月十三日

日本武尊

まはらうとぬ熊襲なるるをたけまらむと云ふも、
かたはらうとぬ熊襲なるるをたけまらむと云ふも、

あつとる

秋露

あつとるは、秋露の気なり。秋の気なり。

あつとる

同廿三日

風送苗香

いづれは、秋の気なり。秋の気なり。

秋山

是の山は、秋の山なり。秋の山なり。

十月三日

庭上月

言上ノ事

言上ノ事

庚子年十月十日... 庚子年十月十日...

雁初来

而路... 雁初来... 雁初来...

同九年十月十二日...

山清村

... 雁初来... 雁初来...

... 雁初来... 雁初来...

山清村

宮内省

... 宮内省... 宮内省...

... 宮内省... 宮内省...

山清村

... 宮内省... 宮内省...

山清村

山清村

... 宮内省... 宮内省...

宮内省

度りもりのふらゆはまろくくし
十月の光は秋の葉のやう

雁初来

而路よるおのり時きと初春のさ井はのりよる

同九年十月十二日

山崎村

この町におく屋敷の種にふくまをゆきま

放りし秋の思ふあつゆき秋をねとまや晴し

まのりよるしとくしとくまの海に暖くまらきさのさふ

昔より之はゆきとくまの山積此よりは海より

句のつらきこと

こまゆ

みまきし事この柳をそそりくはのすね

句のつらき

山崎村

ゆきあつたのゆきんまを年のゆきまもまね

○

康平二年十月廿三日
康平二年十月廿三日
康平二年十月廿三日
康平二年十月廿三日

いふに世にうまれし人
たれにまはらばし
たれにまはらばし

世にまはらばし

十月廿三日

同 年 十 月 廿 三 日

了

故にうしゆしゆの思ふはるはるを
たれにまはらばし

たれにまはらばし
たれにまはらばし
たれにまはらばし

昔よりなほおし
たれにまはらばし

いふに世にうまれし人

世にまはらばし

いふに世にうまれし人
たれにまはらばし

いふに世にうまれし人

世にまはらばし

いふに世にうまれし人
たれにまはらばし

康平二年十月廿三日

○ 庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

心

十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

次子 庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

明治九年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

葡萄酒

庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

心

庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

心

心

庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日 庚子年十一月廿一日

○ 庚子年十一月廿三日

宮内省

Handwritten text in a cursive style, possibly a date or official record.

Handwritten characters, possibly a name or title.

Handwritten text, likely a signature or official stamp.

十一月廿三日

Handwritten text, possibly a date or reference.

Handwritten characters, possibly a name.

宮内省

Handwritten text in a cursive style, possibly a date or official record.

Handwritten text, possibly a date or reference.

Handwritten characters, possibly a name.

Handwritten text in a cursive style, possibly a date or official record.

Handwritten text, possibly a date or reference.

Handwritten characters, possibly a name.

Handwritten text in a cursive style, possibly a date or official record.

宮内省

日月十三年

空ふち

幸つの日も過るるをいと哀しく思ふの言もまじりて

甲子 乙未

あまのこころもいづれかたむかへてゆくもあはれなる

日御子 天孫

けふもあはれなるをいと哀しく思ふの言もまじりて

甲子 乙未

あはれなるをいと哀しく思ふの言もまじりて

日月十三年

新抄

あはれなるをいと哀しく思ふの言もまじりて

十一月廿三日

弘文館

~~あはれなるをいと哀しく思ふの言もまじりて~~

あはれなるをいと哀しく思ふの言もまじりて

日月十三年

空

幸つて日も晴るるをいとめでたしとて、昔のうらまへをよき

月 陽

あまのついでに、なごころもいとくさねのついでに

日 初

けり、なごころもいとくさねのついでに

月 陽

あまのついでに、なごころもいとくさねのついでに

空

山初冬

是の年の山初冬のうらまへをよき

よく聞えはる

十一月廿三日

松本

人々の世に名はけり、はるのうらまへをよき

日月十三年

空

幸の日は晴るるを待ちて暮しの言はまらむ書を

月 陽 二

あまのくみこみよのまのこもくさのあまのくみ

日 陽 二

あまのくみこみよのまのこもくさのあまのくみ

月 陽 二

あまのくみこみよのまのこもくさのあまのくみ

あまのくみこみよのまのこもくさのあまのくみ

~~あまのくみこみよのまのこもくさのあまのくみ~~

あまのくみこみよのまのこもくさのあまのくみ

御制衣

明治十一年

八月三十日

北陸東海兩道

御衣

十一月九日

還幸



御刻の御書
上中下の御書
御刻の御書

明治十一年一月廿五日

御歌會始

鶯入新年歌

吟了しれ年此月と... 吟了しれ年此月と

知るる多之兼... 知るる多之兼

佛當座通題

梅始開

乃々のなる... 乃々のなる

上... 上

石間氷

貴春

八月五日御茶題

伯徳^録 物^のく^り及^り國^ひき^たた^はく^り切^は産^く学^子跡^しけ^り

十一月三日 天長節

山呼萬歳^歳

ぬ^しれ^いも^あら^うら^うと^まな^かれ^と品^々母^もも^はた^から^なり

去年^のい^はな^は年^をこ^し白^きも^もは^たか^らな^りつ^まら^せて^はた^から^なり

十月五日

明治十一年十月六日

齊藤金助

Handwritten text on a slip of paper, possibly a postscript or a note, including the date 十一月三日 (November 3rd) and the name 大塚 (Otsuka).

十二月五日御書

祝

去年の... 白...

十月五日

明治二十一年十月五日

大塚

貴

Blank lined area for writing on the right page.

明治十年一月廿五日

兼題

朝雪

朝戸あどくこれに雪生も白妙小降つむさのり来りも

白妙ハヤシ白子結の事なりと万葉の赤人の富士の頭を使人と誤りしより白妙といふ事なり
とこの詞の「あどく」より上へ改りて「あどく」は「あどく」の誤りなりと云ふ事なり

御當座通題

梅始開

乃とあるを此の詞もあつらひ梅の梅を白ひ初るる

「あどく」は「あどく」の誤りなりと云ふ事なり
「あどく」は「あどく」の誤りなりと云ふ事なり

石間氷

岩の逢にむせひて落る蹴浮せもそは氷の音絶りて
あつちのうら

同年二月五日

兼題

坂上田村麻呂

陸奥其之うらを平らき一印の今もあつちを
結句にこれよりうらとす

結句にこれよりうらとす

御當座通題

霞知春

まをすめりてあま多岐のく此新く秋は通す風もの上

鷺出谷

於のまむいぬのうらをさくらあつちのくさつちのく

物向くくさつちのくさつちのくさつちのくさつちのくさつちのく

同年三月五日

兼題

遙峰帯晚霞

はゆさふのうらをさくらあつちのくさつちのく

物向くくさつちのくさつちのくさつちのくさつちのく

御當座通題

柳光花縁

春の幸しくもなつてゆくも春の物も花の白は後をさうぞ
こゝろははこゝろははこゝろははこゝろはは

舟過蘆間

難波はなをきつり舟をこゝろははこゝろはは
船ははのりせの舟ははこゝろははこゝろはは

舟ははのりせの舟ははこゝろははこゝろはは

同年四月五日

兼題

雨中花

春のあも香くはるさくさく花の春のあつたもあつた

春のあも香くはるさくさく花の春のあつたもあつた

御當座通題

歸一催送

花のあも香くはるさくさく花の春のあつたもあつた

花のあも香くはるさくさく花の春のあつたもあつた

春海邊

春のあも香くはるさくさく花の春のあつたもあつた

春のあも香くはるさくさく花の春のあつたもあつた

春のあも香くはるさくさく花の春のあつたもあつた

同年五月五日

兼題

春のあも香くはるさくさく花の春のあつたもあつた

同辛八月五日

兼題

伯徳球

西の海は田をきふ人の心をいふくまのこころ

とくまのこころ

同辛十二月五日

兼題

冬祝

冬は雪のふりては人の心をいふくまのこころ

とくまのこころ

